

「会員短信 57」

「神輿の町」

峰崎成規

関東にお住まいの方はご存じかと思うが、利根川から分岐した江戸川が東京湾に注ぎ込む辺りに、行徳（市川市）という町がある。かつて行徳は徳川幕府の直轄領で、東日本一の塩の生産地であった。その塩を江戸へ積み出す湊として栄え、江戸川を通じて湊（河岸）は舟運の拠点となった。江戸期には、芭蕉、一茶などの俳人や文人が数多く来訪した。

「行徳千軒、寺百軒」と言われるほど、この狭い地域に多くの寺社が建てられ、それに関わる宮大工、木地師、彫師、塗師、仏師など多くの職人がこの地に住んでいた。

明治期には、その職人の技を生かして、この地で神輿づくりが始まった。明治から平成を通じて、全国での江戸神輿の数は四千基ほどだが、その半数が行徳で作られたといわれている。行徳で最初（明治十年）に神輿づくりを始めたのが、代々仏師を家業としてきた浅子周慶の十三代目であり、私の祖父である。浅子神輿店は十五年前に後継者が絶えて閉店となったが、店構えは重厚な建物で国の有形文化財に登録され、四年前に市川市によって行徳の歴史や神輿の資料館として開設された。開館するにあたって、私は市川市から代々の浅子周慶作の仏像や神輿の資料の収集を依頼され、ようやく展示に漕ぎ着けた。あの世で祖先はさぞ喜んでくれていると思う。

塗師の篋光均して春隣

春立つや木地師木を選ぶ指の腹

春雷や彫師の鑿に龍の浮く